エクステンションセンター公開講座 文学の森 王朝時代と江戸時代の文学をテーマに･･･

エクステンションセンター公開講座「文学の森～日本文学・文化の可能性」が12月6日、13の両日、生田キャンパスで開催された。生田キャンパスがある枡形丘陵は、『万葉集』で「多摩の横山」と呼ばれ、かつての武蔵と相模の国境付近に位置する。多摩川周辺には渡来人が住んでおり、日本と大陸が交流し、豊かな東国文化が開花した。本講座ではそんな万葉文化ゆかりの地で文学に対する理解を深めてもらおうと企画。文学の基盤である王朝時代と開府400年の江戸時代の文学をテーマに、公開講座と関連の貴重書の紹介が行われた。

6日は、西條勉教授による「スサノヲ神話の隠された意味」の講義が行なわれたあと、小山利彦教授が「光源氏の栄華と賀茂の祭祀」と題して講演。『源氏物語』の主人公・光源氏の持つ聖性とヒロイン紫の上・朝顔斎院との間で雅に繰り広げられた賀茂の祭祀との関連について解説。会場を埋めた150人の参加者は熱心に聴いていた。講義終了後は図書館に会場を変え、新資料として図書館貴重典籍に加わった古筆手鑑『墨跡彙考』を中心にした関係資料を見学。ことに『夜の寝覚』と思われる切が注目され、サイバーキャンパス推進室（室長＝松永賢次ネットワーク情報学部助教授）の協力によるオンデマンド方式の解説を聴いた。

13日は、「永井荷風が愛した江戸のメディア」（柘植光彦教授）と「江戸の夫婦のいさかい－いろは短歌」（板坂則子教授）の講座の後、江戸時代名筆・書画（俵屋宗達下絵本阿弥光悦筆『源氏物語 花宴巻 詞書』他8品）の紹介が行われた。

図書館貴重典籍『墨蹟彙考』 総数121葉の古筆切収める

2003年夏に古筆手鏡『墨跡彙考』一帖が本学図書館貴重典籍に加わった。「手」とは文字を書くこと、今でいうところの習字であり、「鑑」はお手本というか、模範となる書物のことである。「手鑑」とは範となる古筆切(きれ)を集めた古写本ということになる。

『墨跡彙考』の書名は中央に大きめの金目地題せんの上に記され、見返しは金模様地で、本文料紙は銀地である。裏面も古筆切が収められ、切の総数は百二十一葉で保存もよく、極(きわめ)札(ふだ)には初代古筆見として名高い古筆了佐や弟子に当る朝倉茂入などの印章が認められる。

あくまでも伝は付くが、古筆は亀山院・後白河院・後光厳院・小野道風・後醍醐天皇等である。平安・中世・近世の歴史・文学・博物館学・書道等の研究者の検証・研究も必要と思われる。

古美術品的価値のみならず今日通行している認識と異なる興味深い切もある。例えば伝後光厳院宸筆の『するほとに』という極札のついた、九行から成る切である。この内容は「院」という人物が恋しい人と死別して、昼夜分けることなく歎き悲しんでいるものである。これは今日欠落して不明になっている平安物語を想定させるのである。その作品は菅原孝標女作の『夜の寝覚』である。例えば新編日本古典文学全集版『夜の寝覚』を開いてみると、中間と末尾に欠巻部分があることを指摘している。

本学所蔵『墨跡彙考』所収切「するほとに」には殊に「院」という文字があり、冷泉院を示すと思われ、また悲しみの対象がヒロイン寝覚の上の偽死事件であることも想定できるのである。『夜の寝覚』研究史において助するべき資料となれば幸いである。（小山利彦文学部教授）

【ニュース専修1月号2面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.